

1 取組名称

日本語のトレーニングを通じた理工学の研究基礎力育成

2 取組組織等

都市教養学部・生命科学コースおよび理工学研究科・生命科学専攻

3 取組実施代表者名

理工学研究科・生命科学専攻・教授・村上哲明

4 取組期間

2年間（平成23年度～平成24年度）

5 取組の概要

日本語の体系的なトレーニングを通じて、論理的で正確な言語の運用技術を身につけ、クリティカルリーディング、クリティカルシンキング、コミュニケーション能力を向上させ、理工学の研究に必要な基盤的学力を育成する。このような広い意味での国語力の育成は、理工学系ではコースを越えて、さらに学部も超えて共通して必要なことである。今回の取組は、パイロット的事業として生命科学コース・専攻で実施、結果・成果を検証した上で、他コース、他学部にも広げていけるもの、広げていくべきものであると考えている。

生命科学専攻は、大学院イニシアティブや大学院 GP に採択されたプロジェクトを通じて、大学院教育の改善・体系化をすすめ、一定以上の成果を上げてきた。一連のプロジェクトでは、多様な取り組みを実施した。これらの取り組みの多くで、参加する大学院生に共通して義務づけたことに、学生が参加する個別の取り組みの目的・意義・期待される成果を一定の書式にまとめ、peer である大学院生の査読を受け、改訂した後、提出することだった。

この過程を通じて、大学院生は、提案者と評価者の異なる立場を経験した。この経験は、提案書の質を向上させただけでなく、大学院生の批判的思考力の向上に役立った。また、学術振興会の特別研究員 DC1、DC2 の採択率も向上した。一方で、一部の大学院生からは、論理的な日本語の書き方、および、日本語の批判的な読み方の体系的な指導が必要だと指摘された。また、学部学生が提出するレポートにも、日本語の運用能力不足に起因する問題点も散見されるようになってきた。

そこで、生命科学コース・専攻では、これまで演習の一部の項目のみとして扱っていた、日本語のトレーニングを、学部・大学院を横断し、組織的により広範に行うプログラムを提案する。そこでは、学部生は、生命科学のコースワークを通じて、日本語の読解、記述、論述の技術を学ぶ。さらにさまざまな実習のレポートを作成する過程で、大学院生の TA による日本語表現の添削を受けることができる体制を提供する。また、TA となる大学院生は大学院講義科目として、生命科学コースの教員は FD として、外部講師による日本語の教授技術に関する講義を受ける。

6 事後評価での総合評定

目的は十分に達成された

7 事後評価に関する教育改革推進事業提案審査会での主な意見

- ・論理的な文章を日本語で書くことの重要性を理解させるために一定の効果がある。
- ・添削業務は特に効果があるが、この方式を全学に波及するには予算的制約が問題となる。